

新規選定① 津和野城下に形成された土塀、水路が続く武家町と赤瓦の町家が連なる商家町

つわのちようつわの
津和野町津和野伝統的建造物群保存地区

所在地 津和野町^{うしろだ}後田の一部

面積 約11.1ヘクタール

津和野町は島根県の西端に位置する。町の中心部である旧城下町は、津和野町の南、周囲を山並みに囲まれた南北に細長い盆地にあって、中央に津和野川が流れる。

津和野城は吉見頼行^{よしみよりゆき}による築城で、慶長5年（1600）に吉見氏が萩に移ると、翌年には坂崎直盛^{さかさきなおもり}が入城したが、その後、断絶する。元和3年（1617）に亀井政矩^{かめいまさのり}が封ぜられ、以後明治維新まで亀井氏が居城した。元禄年間（1688～1704）の絵図には、武家町、商家町、寺町の詳細な敷地割が描かれ、この頃には城下町として完成した。

保存地区は、東西約160メートル、南北約700メートル、面積約11.1ヘクタールの範囲で、旧城下町の北部に当たり、津和野川と西の山裾に挟まれた旧山陰道の両側に形成された武家町及び商家町からなる。

南半の殿町は旧の武家町で、筆頭家老^{たご}の多胡家をはじめとした上級家臣の居住地であり、江戸末期は東半を藩校養老館^{ようろうかん}の敷地が占めた。近代以降、鉄道の敷設や道路の整備があったが、水路や土塀が続く景観は、武家町の様相をよく伝えている。多胡家や養老館の一部が現在も残り、カトリック教会等の近代建築も町並みの点景となっている。

北半の商家町は、旧山陰道を中心とした各通り沿いに町家が連なる。旧山陰道に面した町家の規模は大きく、背面の通りまで一敷地として通すものもある。町家の主屋は、切妻造^{きりづま}棧瓦^{さんがわら}葺で、平入^{ひらいり}とするのが一般的である。屋根は赤茶色の石州瓦^{せきしゅう}を特徴とする。

城下町の形成に併せて整備された水路は、現在も地区内の各通り沿いに豊かな水の流れをみせる。

津和野町津和野伝統的建造物群保存地区は、江戸前期までに整備された津和野城下町のうち、上級家臣の居住地であった武家町及び旧山陰道を中心とした商家町からなり、近世からの地割はよく旧態を保持している。武家屋敷の一部や、江戸末期から昭和初期にかけて建築された町家等の伝統的建造物群が、各通り沿いに流れる水路等と一体となって特色ある歴史的風致を形成しており、我が国にとって価値が高い。



殿町の景観（武家町）



旧山陰道沿いの町並み（商家町）



津和野町津和野伝統的建造物群保存地区の範囲

新規選定② 津山城下町に形成された、重厚な軒が連なる商家町

津山市城東伝統的建造物群保存地区

所在地 津山市橋本町、林田町、勝間田町、中之町、西新町及び東新町の各一部

面積 約8.1ヘクタール

津山市は、岡山県の北東部に位置する。慶長8年（1603）に美作国に封ぜられた森忠政が津山城を築き、城下町を整備した。城の周囲に武家地、城下町の南半部を東西に通る出雲往来に沿って町人地が形成された。城の東を流れる宮川の東側にも城下町が形成され、出雲往来に沿った町人地が保存地区に当たる。地区の東部には、国指定史跡箕作阮甫旧宅がある。

保存地区は、東西約1,050メートル、南北約480メートル、面積約8.1ヘクタールである。出雲往来には、道路が折れ曲がる枡形が2か所あり、東西端と中程に関貫（木戸）が設けられた。屋敷地は、往来に沿って間口2間から4間程度の幅で割り付けられ、大規模なものでは10間を越えるものもある。奥行きは17間程度で規格的に割り付けられ、敷地背面には背割溝が通され、現在もこの溝が残っている。

各敷地では、往来に面して主屋が建てられ、その背後に附属屋や土蔵が建つ。江戸時代から明治に建築された二階部分が低いつし二階建ての主屋が数多く残り、一階の屋根には本瓦を使用しており、低く重厚な軒が連なる特徴ある町並みを形成している。主屋の一階、二階ともに、窓に様々な意匠の出格子が使用される。二階では、むしこ窓もみられ、腰になまこ壁を使用するものや、意匠を凝らした袖壁をもつものが多い。角地では、屋根をいりもやづくり入母屋造としたり、往来に直交する小路に面する壁面にも様々な意匠を凝らしており、小路の景観も特徴的である。

津山市城東伝統的建造物群保存地区は、城下町の商家町として発展した町並みで、江戸時代に形成された町割を良く残し、江戸時代の町家を主体として昭和戦前期までに建築された、出格子窓、むしこ窓、なまこ壁、袖壁などを使用し、意匠的に優れた伝統的建造物が密度高く建ち並び、城下町に形成された商家町の歴史的風致を良く伝え、我が国にとって価値が高い。



東新町の町並み



勝間田町の町並み



津山市城東伝統的建造物群保存地区の範囲